



Title	「車文化としての地域振興イベント」：金津創作の森におけるフレンチトーストピクニック13年開催の歩み
Author(s)	益岡, 了
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56312
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「車文化としての地域振興イベント」

～金津創作の森におけるフレンチトーストピクニック13年開催の歩み～

益岡 了／岡山県立大学デザイン学部

はじめに

福井県あわら市「金津 創作の森」は、福井県北部地域の文化行政の中核施設として、当時の金津町によって運用が開始された「アート体験型美術館」である。創作活動の展示発表だけでなく、ガラス工房やろうけつ染めなどの各種講座を実施する創作工房や、作家アトリエゾーン、環境に配慮した森の中の屋外空間とともに運営されてきた。

県内外の美術・デザイン運動と連携した活動が行われる一方で、その施設の有効性や運用費の効率を巡っては、来場者数や地元との積極的な交流が求められ、議論の対象となっていた。その結果、当時の地元評議員から新たな地域振興イベントの可能性が提言された。

地域振興イベント：フレンチトーストピクニック (French Toast Picnic) の始まり

平成12年春今村幸次郎氏の作品展の企画が決定された。今村氏は車、特にフランス車(シトロエン社製)を題材に採った作品が知られており、その期間中に連動するイベントの実施が決定された。同時に同様のイベントの実務に詳しい有志を、福井県下を中心に募り、イベントの方向性や内容について検討された。報告者は当時、福井市内に在住・勤務しており、そのために第一回イベントから実行委員を務めている。

車を中核としたイベントは国内各地で頻繁に実施されているが、当時福井県内では大規模な開催例が無く、現地の愛好家からは歓迎の声が大きかった。そこで他の地域のイベント実績を参考にしながら、より文化政策と適

合しつつ地方振興としての側面を強調した運営が決定され、具体的には下記の主な行事が計画された。

1. タイムラリー

一般的な車両イベントでも実施される例が多いが、ゆったりと隣接地域の景勝地：北潟湖周辺道路を運転する意図を明確にするために「フレンチトーストピクニック」とイベント名が決定された。なおラリー競技上位入賞者には、創作の森と関係する作家が制作したトロフィーが贈られる。

2. 旧車展示

特に支援を得たのが日本自動車博物館で、会場近くにあつて国内で最大規模の自動車博物館である。その展示車両の動態保存に協力している「渡辺モータース」からは、地元の人材紹介含めて多大な協力を得ている。

3. 講演会

公共施設を用いた文化振興としての一面に留意し、日本を代表する自動車評論家「小林彰太郎」氏を招聘した。小林氏は初代カーグラフィックス誌の初代編集長として知られる。

4. 協賛企業関係のイベント

運営費用の大半は上記のタイムラリー・旧車展示参加者からの参加費用で賄われる。そのために参加者に対して多くの記念品や景品の準備が求められた。そこで県内外の企業への協力を求めるとともに、協賛企業の展示や営業のために会場内で簡易ブースの設置などの便宜を図った。

フレンチトーストピクニックの継続運営

第一回フレンチトーストピクニック開催は同年5月21日で、当日は天候にも恵まれ、会場であった創作森美術館開館以来、最大級の入場者が集まったと考えられた。参加者からの聞き取りやスタッフ側からの意見も概ね好評であり、圧倒的な来場者数や地域振興の意義が評価され、以降の毎年開催が第一回の終了直後に決定された。

現在、フレンチトーストピクニックは連続13年間開催されてきた。同様のイベントが数回を待たず中止される場合が多いが、本イベントの場合には参加有志の多くが地域に密接しており、また連続して参加する者が多く、連続開催による経験の蓄積と体制改善の面で有利に働いている。

また運営委員は基本的に無給であるが、委員自身が車両文化への理解が深く、その結果イベント参加者同様に、開催への期待と充実感があり、積極的な参加が誘引されている。

費用の面では、現在でも最低限の行政支援のみで運営が継続されており、商業的な反目による中止を避ける要因と考えられる。また第一回から実行委員長を務める伊藤憲治氏（現株式会社金津技研代表取締役社長）をはじめとする中核スタッフの献身も重要である。この様に当地での同類イベントが無く、経済的に自立し、運営に精通した積極的な委員に支えられた地域振興イベントは、規模を拡大しつつ来年度以降の開催が計画されている。

しかしながら継続開催を通じて幾つかの課題も認められる。特に急増した来場者への対応である。既に施設に隣接した駐車場だけでは来場車両の収納は不可能な状況であり、臨時の駐車場を設けてシャトルバスの運行を市に依頼し対応している。

また参加者数が増加するとともに、遠方地からの参加者・来場者も増え続けている。継

続的な開催による周知が進んだ結果であり、地元の温泉街への宿泊客の増加といった成果も現れている（イベントと連動した宿泊プランの設定も実施されるようになった）。

一方でタイムラリーの参加台数増加によって、開催時間が延長され、これは遠方参加者にとっては負担増となった。また来場者の増加によって講演会場への来場者収容にも問題が生じてきた。そこで現在では会場屋内での講演会は行わず、替わって屋外の旧車展示会場でのゲストトークを実施している。これは最も大きな行事変更である。



1899年製「ド・ディオン・ブートン号」試走模様

おわりに

当該地域の様に住民が少なく、金沢市内から約一時間、名古屋・京都市内からは約三時間という立地にあって、僅かな予算と限られた有志の協力で10年以上に渡って数千人規模のイベントを継続できたことは、美術館・施設の有効活用だけでなく、地域全体へ波及と活性化との視点からも注目に値する。

現在では、旧車（特にクラシックカーと呼ばれる戦前の車両）の同乗走行会も実施され、これは年少から壮年まで参加者に好評であり、文化遺産の学習体験の機会とも考えられる。希少車の実走行を含めた展示は注目され、雑誌や新聞、テレビの取材も増えた。この様に北陸地域の車文化を全国に伝え、活気ある交流の場として、地域振興の舞台として、その存在が知られつつある。